序章　地域に開かれた大学の創造

新田　照夫

1節　社会対応型の大学教育（研究）をリードする大学生涯学習の創造と大学改革

現代社会では、「環境・福祉・医療・地域活性化のためのまちづくり」といった、現代的課題や地域的課題のグローバル化と複雑さが一層増していて、高度な科学的調査や研究に裏付けられた問題の分析と解明が求められている。加えて今日では、問題解決にいたるまでの合理的道筋と展望まで分析や解明を行うことも社会的ニーズとして大学に求められており、そのためにはより多くの地域住民がこうした現代的課題や地域的課題についての理解を深め、社会の中で連携を広げていくことが重要になっている。大学生涯学習はこうした社会の現代的ニーズに対応することができる「より公共性の高い大学教育と研究」の創造をめざすものであり、長崎大学においても相当数の教官が地域対応型の教育と研究の創造のために貢献しているところである。長崎大学生涯学習教育研究センターはこうした大学生涯学習を創造するための全学的共同教育・研究センターとして設立された。

・大学が必要とするより広い公共社会からの支援

大学という所は、一方では現代的課題の分析と解明のための「研究」の場であるとともに、他方では現代社会に生きる人々のための「教育」の場でもある。しかし、ともすれば高度科学技術の開発をあせるあまり、経費がかかるわりには成果をすぐには期待できない基礎研究が軽視されたり、高度科学技術者養成をあせるあまり、人間としての基本的資質や多様な個性、さらにはより広い世界の中で生きる活動的な社会性を育成するための大学教養教育を軽視する傾向がある。大学が公教育機関としての公共性を自ら捨てるならば、大学が危機に

陥ったときに幅広い人々からの支援を得ることは難しくなるであろう。

我が国の大学政策を全体として見るならば、これまでのような、国に対する依存度を極力低め、それぞれの大学が自力で存続していく道を模索していく方向に向かうことはもはや確実と見るべきであろう。我が国の大学の多くは、今後社会の中で存続するために、社会的評価を受けることが求められるようになってきた。もっぱら国との関係でしか機能してこなかった国立大学が、今後は「社会的評価」を受けつつ、これからの社会を自力で生き抜くということは大変困難な道であり、難しい選択を迫られる時代に入ったということができる。

そこで私たちに残された選択肢は、概して、こうした動向を合理化として否定的に受け止め、徹底した合理化と効率化で対応しようとするのか、あるいは公教育あるいは公的研究機関としての公共性と機能を地域社会の中でいっそう高めることにより、地域社会全体の支持と支援を得て、自らの危機を乗り越えていこうとするかの二つに一つである。前者の選択肢は「高度科学技術研究」とそのための「技術者養成」といった「大学の専門学校化（世界観や人格の形成、社会性・公共性の育成などを含む本来の意味での専門教育ではなく、単なる技術者養成といった狭義の意味での専門教育）」であり、後者は「現代社会に生きる多数の人々のための現代的課題、地域的課題、生活課題の分析と解明のための研究」と、「人間としての基本的資質や多様な個性、さらにはより広い世界の中で生きる活動的な社会性を育成するための大学教養教育を重視する教育」といった、より公共性の高い「大衆的大学化」である。

今後大学が生き抜くためには、より安定した教育・研究基盤を自力で確保することが不可欠であり、そのためには、後者の選択肢のように、より広い公共社会の評価を受けることが求められる。大学生涯学習とは、後者の選択肢のような、より広い公共社会の評価を受けるための大学教育と研究の創造活動である。多くの学内教官に大学生涯学習の意義とそれがめざす目的に共感していただき、生涯学習教育研究センターの事業にかかわっていただくことを切に望むものである。

・教育システム全体をより広い公共社会に開くことをリードする大学生涯学習

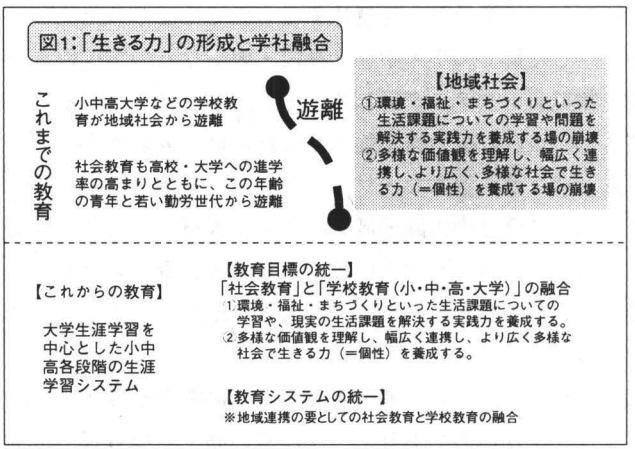
広い公共社会の中により安定した教育・研究基盤を持つことが求められてい

るのは大学だけではない。我が国の教育システムは、明治の学制発足以来、全体として国のコントロールが強くはたらいてきたため、「公共社会」とは「国」であり、必ずしも「地域社会」を意味するものではなかった。したがって、地域社会から遊離した形で、小・中学・高校・大学などの学校教育が整備され、さらに大学受験競争システムを通して、国立大学を頂点とする大学序列と結び付けられてきた。これは国力を増強させるためには大変効果的システムであり、現実に全国津々浦々から優秀な人材と社会的資本を国に集中していった。しかし反面では、地域社会は中山間地域を中心に、人材の育成と社会資本の整備が遅れ、日本は政治・経済・文化といったあらゆる分野において、国力（中央）と地域社会（地方）の力とのバランスを大きく崩してしまうことになったのである。

たとえば、経済については、消費と生産の間の循環がうまく図れなくては利潤を生むことはできないのであり、これは言い換えるならば、市場あるいは生産管理の主な舞台としての中央と生産の主な舞台としての地方との経済的循環をうまく図ることが重要になってくるということである。しかし現代社会では、市場あるいは生産管理の主な舞台としての中央（都市社会）ばかりが巨大化し、消費あるいは生産の主な舞台とされてきた地方（地域）の力がますますぜい弱なものになっている。その結果、中央と地方の間で経済的循環がうまく図れなくなり、我が国は全体として経済的硬塞状態になってしまっている。政治や社会システムにおいては中央の管理システム（官僚制度）の巨大化の弊害がますます露呈しつつあり、我が国の今後の発展のためには地方あるいは地域社会の政治・経済的力量を高めることが一層求められている。

「地方あるいは地域社会の政治・経済的力量を高める」ということは、言い換えるならば、地域社会の政治・経済を担う人材を育成するということに尽きる。そのためには、第一には、「環境・福祉・まちづくり」といった地域課題あるいは生活課題についての学習や問題を解決する実践力を養成する場が崩壊してしまった地域社会を再生することが求められ、第二には、多用な価値観を理解し、幅広く連携し、より広く、多様な社会で生きる力（＝個性）を養成する場が崩壊してしまった地域社会を再生することが求められる。本来は、地域社会の公教育システムがこうした地域社会の再生の拠点となるべきものであり、大学生

涯学習は、地域社会の公教育システムの中心として、地域社会の再生課題に取り組む大学教育あるいは研究を創造することをめざすものである（図１参照）。



大学生涯学習は地域社会の社会教育システムと学校教育システムとの連携を積極的に図っていく。その理由は、現在の大学改革論に中等教育論が不在であり、青年期の発達についての教育論が欠落しているからである。「大学教育に中等教育論が不在である」ということは、大学教育が専門技術教育のための狭義の専門学校化し、哲学的あるいは世界観形成といった人格教育をめざす教養教育をベースにした本来の意味での「専門的教育」にはなっていないということである。これは大学教育レベルの「教養教育」についての基礎研究が我が国では極めて貧困であることを示している。中学・高校での教育は、大学受験システムの中で、断片的知識の機械的学習に陥り、哲学的あるいは世界観形成といった人格教育をめざす教養教育が大学以上に貧困な状況に陥っていると言わざるを得ない。今日では、こうした状況が、学校教育全体の危機的状態の主な原因になっていて、生涯学習の振興を通して、地域社会との連携を強め、社会性や人間性の育成が急がれているところである。しかし、小中学高校が生涯学習の振興に努めようとしても、肝心の大学教育が「哲学的あるいは世界観形成といった人格教育をめざす教養教育」を軽視し、本来の意味での「専門的教育」を推進することなく、従って、大学入試についても旧態依然たる断片的知識の切り売りの量を図るシステムに止まっている限り、「社会勉強や人間性の教育も結構

だが、大学受験学力にもっと力を入れて欲しい」と願う父母が後を断たない。その結果、「人間としての基本的資質や多様な個性、さらにはより広い世界の中で生きる活動的な社会性を育成するための教養教育」を実現しようとする小・中学・高校での生涯学習に向けての努力は困難な壁に衝突するのである。これは丁度、「高度科学技術の開発をあせるあまり、経費がかかるわりには成果をすぐには期待できない基礎研究が軽視される」大学の状況とまったく同じ構造が地域社会の父母の意識にも根強く在ることを示している。

そこで、大学生涯学習としては、「①人間としての基本的資質や多様な個性、さらにはより広い世界の中で生きる活動的な社会性を育成するための教養教育」と「②環境・福祉・まちづくりといった生活課題を理解するための学習やこうした課題を問題を解決する実践力の養成」「③多様な価値観を理解し、幅広く連携し、より広く、多用な社会で生きる力（＝個性）の養成」をめざす、大学生涯学習カリキュラムの研究に取り組むことが求められる。

2節　現代的課題や地域的課題と向き合う大学生涯学習カリキュラムの研究

大学生涯学習は以下の領域について学習カリキュラムの開発をめざすものである。

大学生涯学習カリキュラム開発の領域

①大学教養教育

②現代的・地域的課題についての実践的学習

③社会の中で幅広く連携する力の育成

「①大学教養教育」の目標は、人間としての基本的資質や多様な個性、さらにはより広い世界の中で生きる活動的な社会性を育成することにある。

大学生涯学習カリキュラム開発の領域：
①大学教養教育

(a) 人間としての基本的資質

(b) 多様な個性

(c) より広い世界の中で生きる活動的な社会性

(a) 人間としての基本的資質：

まず第一に、生命に関する尊厳意識の形成をあげなくてはならない。人間が開発した科学技術が殺人兵器開発に化け、平和を脅かすことにならないよう社会全体で常に監視する意識を高め、またそうした監視活動に積極的に参加する人間の形成をめざすことが求められる。そのためには「科学」あるいはもっと狭義に「科学技術」開発というものを無条件で「称賛」する人間を作るのではなく、時には「科学技術」というものが地球上のあらゆる生命の尊厳を脅かし、自然破壊につながる危険な「自然観」も含んでいることを理解できる人間の育成が重要になる。(総合科学としての哲学・倫理学：科学論、平和論、生命に関する総合科学論などに加え、これらの領域についての実践論、運動論、ディスカッション、実際の活動に参加するフィールドワーク)

第二に、自然破壊を行なってでも利潤や便利さを追究しようとする人間のエゴイズムを常に監視し、これを抑制する活動に積極的に参加できる人間の育成をめざすことが重要である。そのためには産業革命以降の近代市民社会というものが、一方では、人間の精神を解放し、「自由な個」の「自由な関係」を保障する市民社会を形成したことを認めつつも、他方では市民社会に参加することを拒否し、「自由な個としての市民」になりきれなかった少数民族の生活や、人間以外の地球上の生命の尊厳を脅かしてきた歴史であったことも知ることが求められる。(総合科学としての歴史学・社会学＋これらの領域についての実践論、運動論、ディスカッション、実際の活動に参加するフィールドワーク)

大学生涯学習カリキュラム開発の領域：
①大学教養教育（総合科学と実践的活動を含む）

(a)　人間としての基本的資質

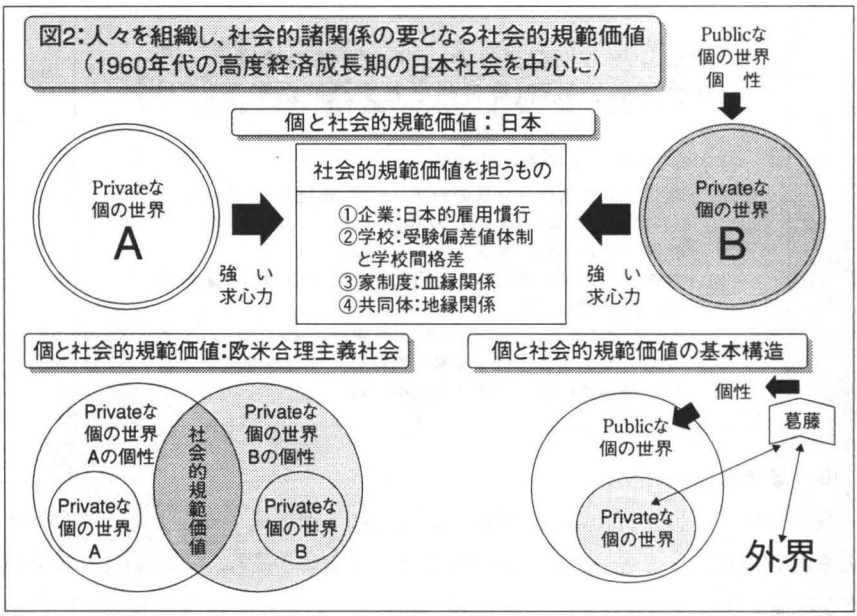
・生命に関する尊厳意識の形成（哲学・倫理学・生命科学）
（科学技術開発というものが時には自然破壊につながる危険な「自然観」を含むことを知る。）

・産業革命以降の近代市民社会についての批判的意識の形成（歴史学など）
（自然破壊を行なってでも利潤や便利さを追究しようとする人間のエゴイズムを常に監視し、これを抑制する活動に積極的に参加できる人間の形成）

(b)　多様な個性

我が国では「個性」という概念は、一般的に「他と違うこと」あるいは「人の常識を覆すような何か突拍子もないこと」ぐらいの認識しかないようであるが、本論ではこの二つとも誤った理解であると言わなければならない。まず「個性」とは、「Private な個」の世界が、「外界」との葛藤の末、獲得する「Public な個の世界」のことを意味する。欧米の合理主義社会では、個々の「Public な個の世界」が重なる部分において「社会的規範価値」を形成し、この価値観によって人々が広く結び付けられている。このように「個性」とは、「Private な個」 の世界を基盤にして生成しつつ、極めて公共的規範要素を含むものであり、こうした伝統の薄い我が国においては、理解が難しいものである。

図2は日本における「個性（Public な個の世界）」の形成がいかに難しいかを示したものである。我が国では、社会的規範価値を担うセクターが、国家によって上から組織・制度化されてきた歴史がある。「企業を舞台にした日本的雇用慣行」「学校を舞台にした受験偏差値体制と学校間格差」「家制度を舞台にした血縁関係」「共同体を舞台にした地縁関係」などがそれである。これらのセクターが日本社会の中で織り成して形成している「社会的規範価値」の個人にたいする強制力には巨大なものがあり、個人はこれらに一方的に求心されていくしかない。その結果、日本社会では「個性（Public な個の世界）」の形成が許されず、社会的規範価値の構造から弾き飛ばされてしまう傾向にある。世界でも希



な我が国の経済成長、そしてその頂点としての1960年代の高度経済成長期はこうした社会的規範価値の構造により達成されたのである。

しかし、人間の精神を解放し、「自由な個」の「自由な関係」を保障する欧米型の市民社会とは異質の日本社会は、国際化の流れの中で修正を余儀なくされつつある。とくに、「個性（Public な個の世界）」の形成を許さない「日本的社会規範価値」は国際社会で「閉鎖的」あるいは「公正さに欠ける」として受け入れられず、国際社会で活躍する企業を中心に「個性（Public な個の世界）」の形成が強く叫ばれつつある。生涯学習はこうした社会変動の中で出されてきた新しい教育であると言うことができる。

(c)　より広い世界の中で生きる活動的な社会性

「より広い世界の中で生きる活動的な社会性」の育成のためには、図２にある強い個性の形成と、個性の重なる部分に形成される「社会的規範価値」を担う力、「社会的規範価値」を主体的に形成していく力の育成が求められる。「生きる力」とはこうした力のことであり、日常生活のあらゆる場面において、意識

的に生きる力の形成のための努力が欠かせない。我が国の学校教育のように、生活場面から切り離された所で、観念的に詰め込まれる断片的知識の積み上げからはとうてい形成されない能力である。

そこで、「より広い世界の中で生きる活動的な社会性」の中で、とりわけ重視しなければならない能力は「自分とは価値観を異にする人を理解し、受け入れ、共に社会を形成していく」能力である。要するに、「他人を理解する」とは、決して「自分を殺して他人の価値観なり世界に入り込み、迎合する」ことでも、反対に「他人を殺して、自分の価値観なり世界に強制的に引きずり込み、同化させること」でもない。我が国や世界の歴史では、こうした誤りが繰り返されてきたことを我々は知るところである。

大学生涯学習カリキュラム開発の領域：
①大学教養教育（総合科学と実践的活動を含む）

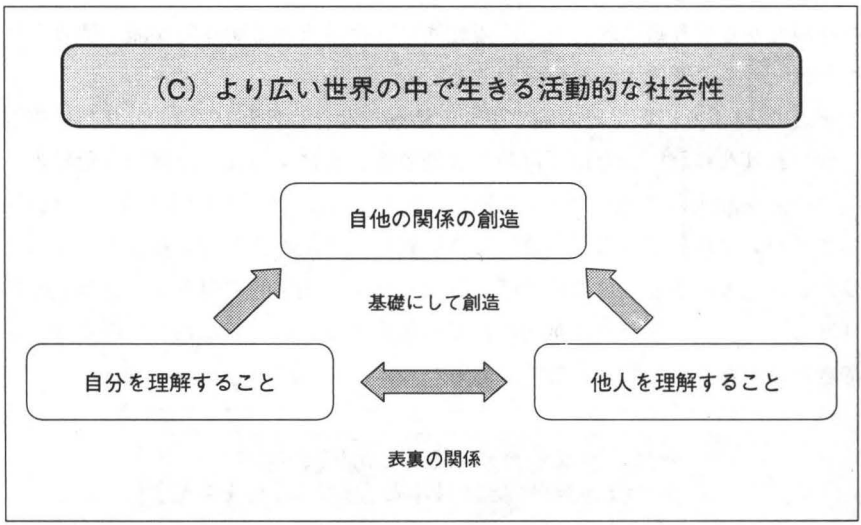
(c)　より広い世界の中で生きる活動的な社会性

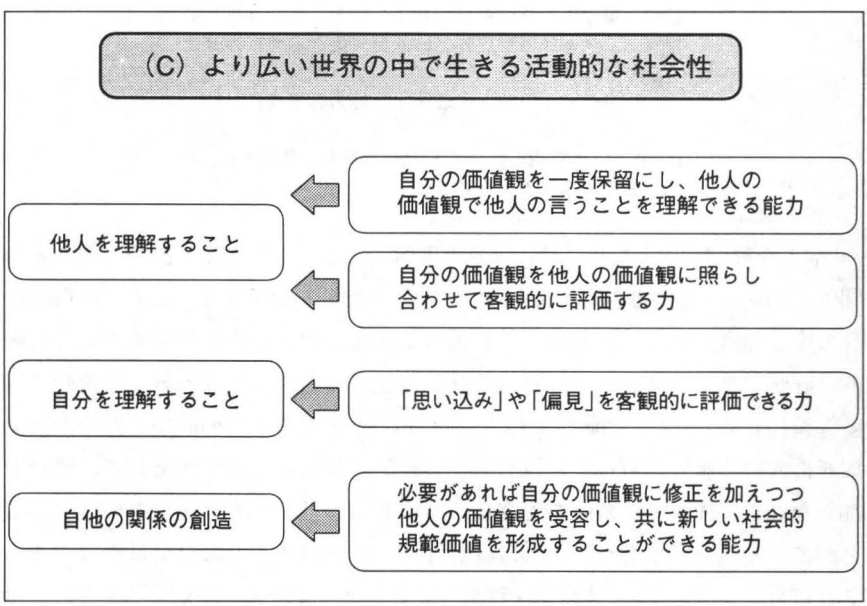
・個性の重なる部分に形成される「社会的規範価値」を担う力、主体的に形成していく力（生きる力）の育成

↓（他人を理解する能力の形成）

・「自分とは価値観を異にする人を理解し、受け入れ、共に社会を形成していく」能力

「他人を理解する」ためには「自分を理解すること」そして「自分と他人との関係」を創造する力も合わせて必要となる。「自分を理解する」ためには自分自身の中に無意識のうちに形成してしまっている「思い込み」や「偏見」を客観的に評価できる力が求められる。これを可能にするものが「自分の価値観を一度保留にして、他人の価値観で他人の言うことを理解できる能力」「自分の価値観を他人の価値観に照らし合わせて、客観的に評価し、必要があれば、修正を加えながら、他人の価値観を受容し、共に新しい社会的規範価値を形成することができる能力」であり、これ自身が「他人を理解する」ことにほかならないことは言うまでもない。「自分を理解する」ことと「他人を理解する」こととは表裏一体であることがよく分かるであろう。こうした相互理解を経ずに、関係


（C）より広い世界の中で生きる活動的な社会性
自他の関係の創造
基礎にして創造
自分を理解すること
他人を理解すること
表裏の関係


（C）より広い世界の中で生きる活動的な社会性
他人を理解すること
自分の価値観を一度保留にし、他人の価値観で他人の言うことを理解できる能力
自分の価値観を他人の価値観に照らし合わせて客観的に評価する力
自分を理解すること
「思い込み」や「偏見」を客観的に評価できる力
自他の関係の創造
必要があれば自分の価値観に修正を加えつつ他人の価値観を受容し、共に新しい社会的規範価値を形成することができる能力

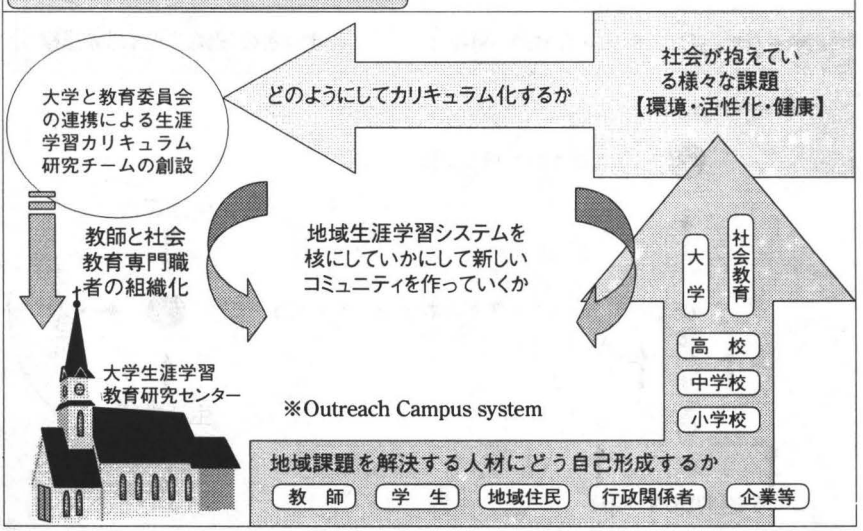
を作ろうとすることは、力関係の強い方の論理で「短絡的な関係」を作るようなものである。「より広い世界の中で生きる」ためには「自分を理解する」能力と「他人を理解する」能力が不可欠であり、「活動的な社会性」を形成するためには相互理解に基づく「自他の関係を創造する」能力が重要である。

②現代的・地域的課題についての実践的学習

環境・福祉・まちづくりといった現代的課題あるいは生活課題を理解するための学習やこうした課題あるいは問題を解決する実践力の養成のためには、高度な科学的調査・研究に裏付けられた問題の分析と解明が求められる。加えて今日では、問題解決にいたるまでの合理的道筋と展望まで分析・解明することも社会的ニーズとして大学に求められており、そのためにはより多くの地域住民がこうした現代的課題・地域的課題についての理解を深め、問題の分析と解明に参加できるようにする必要がある。そのためには、大学という普遍的教育・研究機関の活用を図ることが重要である。

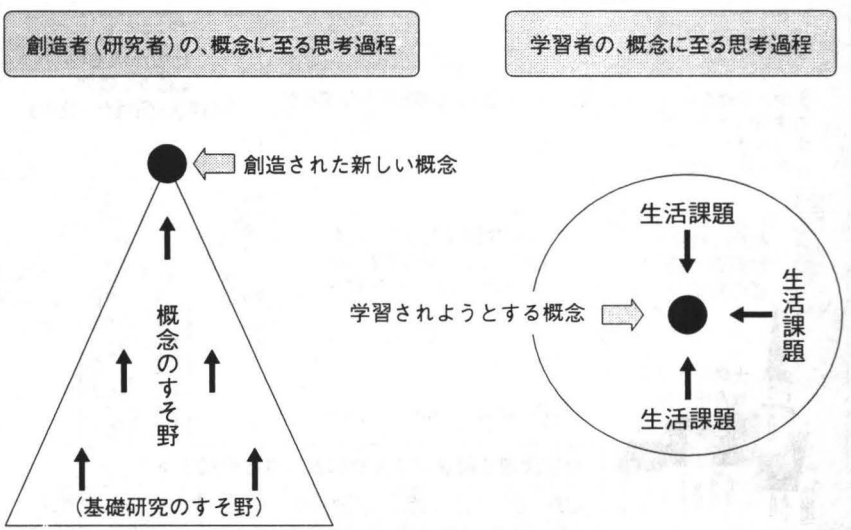
環境・福祉・まちづくりといった現代的課題あるいは生活課題を理解するための学習カリキュラムは、こうした課題に直面している人々自身の参加による

図3：大学生涯学習とまちづくり



生活課題の分析から始めることが重要である。その理由は、生涯学習は学習者の主体性を重視するからである。一般的に学習者が、ある知識なり概念を獲得しょうとするとき、その知識なり概念を最初に創造した人とは逆の思考をたどることを忘れてはならない。すなわち、知識なり概念を最初に創造した人は、様々な概念のすそ野を基盤としてその概念に達していることから、その概念に対しては「主体性」を確立しているということができる。ところが学習者は、概念の創造者（研究者）と同様の思考過程、すなわち概念のすそ野からたどることは難しく、概念のすそ野から切り離された単なる知識としてのみ学習することを余儀なくされる。したがって、学習者は概念に対する主体性を獲得することは難しいことから、学習の主体性を獲得するためには、出来る限り概念の創造者に近い思考をたどり、学習者自身の生活課題から出発し、その課題の解決のために必要とされる概念として学習が展開されることが望ましい。

次に、システムの問題として、生涯学習教育研究センターと教育委員会の連携による生涯学習カリキュラム研究チームを大学内に設置することが求められる。同研究チームは「地域の小・中学・高校・大学の教師」「地域住民」「行政関係者」「企業等」などで構成され、「地域課題を解決する人材にどう自己形成するか」という課題を目指している。そして、大学の校外型キャンパス（Out-



reach Campus System)」としての「地域生涯学習システム」の核となることが期待されている。

「行政関係者」あるいは「企業等」の参加が求められる理由は、大学生涯学習カリキュラムが以下の領域におけるボランテイアの養成をめざし、将来的には資格として制度化をめざしているからである。

①環境マネジメント

②福祉ボランティア（介護ヘルパーなど）

③まちづくりなど

これらのボランテイアは、幅広い「社会性・公共性」と同時に、総合科学としての「専門性」を必要としている。この「社会性・公共性」と「専門性」は本来は車の両輪であるにもかかわらず、大学改革の中では、高度科学技術者養成をあせるあまり、人間としての基本的資質や多様な個性、さらにはより広い世界の中で生きる活動的な社会性を育成するための「社会性・公共性」すなわち「大学教養教育」を軽視する傾向にあった。大学生涯学習カリキュラムでは「地域課題を解決する人材にどう自己形成するか」といった「実践力」の養成まで求められることから、単に科学的調査・研究に裏付けられた問題の分析と解明に止まらず、問題解決にいたるまでの合理的道筋と展望まで分析・解明する必要がある。従って、大学生涯学習の教師は担当領域のみの専門性だけでは不十分で、人間としての基本的資質や多様な個性、さらにはより広い世界の中で生きる活動的な社会性を育成するための「社会性・公共性」すなわち「大学教養教育」についても高度な専門性が求められる。本来大学における「専門性」というものはこうした姿であるべきだが、多くの大学は高度科学技術者養成をあせるあまり、単なる専門学校化しつつあり、公教育機関としての公共性を失いつつあるように思われる。

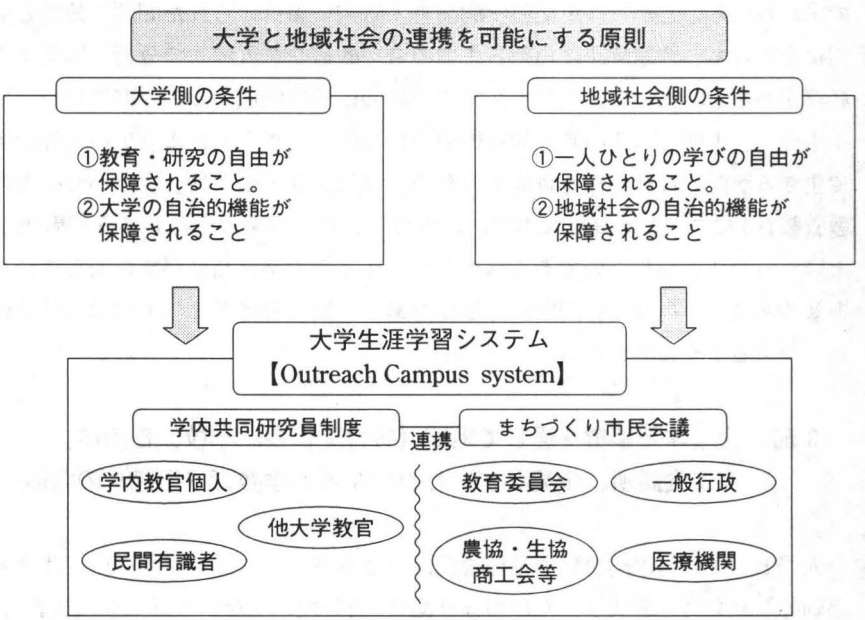
3節　生涯学習事業を通して地域（教育委員会、学校、自治体、商工会議所、企業など）と連携する大学教育（研究）の創造

人間としての基本的資質や多様な個性、さらにはより広い世界の中で生きる活動的な社会性を育成するための「社会性・公共性」すなわち「大学教養教育」

を可能にするためには、大学を中心として、地域社会の中で幅広く連携する「大学の地域連携機能」の整備が重要になっている。大学自身が社会から閉鎖的存在になるならば、大学で行なわれている教育・研究機能を、多様な価値観で自己評価し直し、社会の中で幅広く連携し、より広く、多用な社会で生きる力(=個性）を養成していく機能は失われていく。すなわち大学自身の社会性・公共性が失われていくということである。図4は大学の教育・研究と大学生涯学習システムの関係を示したものである。

大学と地域社会はそれぞれ独自の論理と歴史があり、無原則にストレートな連携は難しい。大学と地域社会が連携を可能にするためには以下の原則が不可欠である。

地域の社会人が正規の大学構成員として学内に入ってくることにより、「大学における教育・研究の自由と大学の自治機能」が「地域住民の学びの自由と地域社会の自治機能」と結び付くことが可能になる。これまで、大学における教育・研究の自由はともすれば地域社会にとっては、閉鎖的になり、いわゆる「象げの塔」を作り上げてしまう傾向にあった。現代社会では、「大学における教育・



研究の発展」と「地域社会と連携を結び、開かれた大学にする」ことの両方が求められている。これを可能にするためには、地域住民を正規の大学構成員として受け入れることと、地域社会においても、正規の大学構成員として受け入れられた住民を中心に「まちづくり市民会議（仮称）」を組織し、地域自治の担い手として自己形成していくことが求められる。

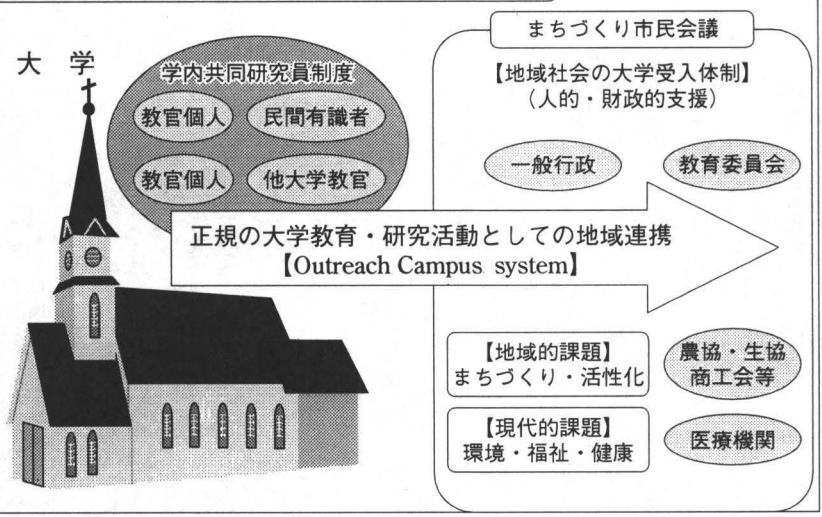



図４：大学の教育・研究と大学生涯学習システム